

夜の祭りに出没すると噂されている高橋夫婦です。

この祭事は叡電木野駅の北東約 300m に鎮座する木野愛宕神社に於いて毎年 10 月 23 日夜に行われる 16 歳になった少年の言わば元服式です。市登録無形民俗文化財に指定されております。

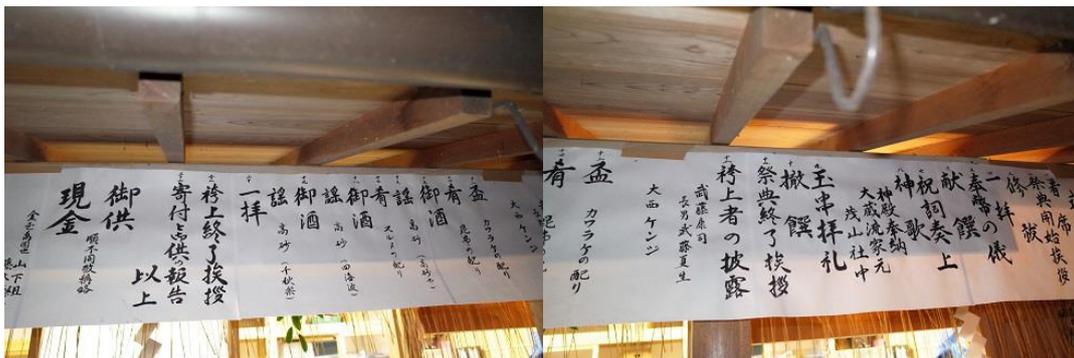
普段、この神社を訪れると人気（ひとけ）が無く、また、鳥居の下に竹が横に渡してあり入りづらい印象を受けます。しかし、この晩は鳥居の下に遮るものはなく、提灯も点灯し、焚火の木のはぜる音も聞こえ何かしらの準備をしているのが窺えます。



愛宕神社と名乗っているのですが、どういう理由なのか地元の方にお訊きしてみると、昔、ご先祖様が嵯峨野でカワラケを作っていたからだそうです。その後、ご先祖様の一部が土を求めて、幡枝の地を経て、ここ木野に移っていらしたそうです。それで祭神のお名前に『愛宕』『野々宮』と出て来るそうです。『太郎坊』というのも滋賀県の太郎坊ではなく愛宕神社の奥宮がらみようです。この神社は神職さんもおらず、有名ではありません。しかし、そのご由緒から、長らく野々宮神社との関係が深かったそうです。野々宮神社の方は、戦火などで焼けてしまったことが多く、両社に関する文書があまり残っていませんが、こちらの神社には文書が多く残っていたそうです。現在は市歴史資料館に預けてあると伺いました。



見物客は 10 名も居なかったようです。報道陣も来ていませんでした。あとは、保存会の方々と地元のお手伝いをする方たちだけ。走り回ったり、騒ぐような子供は皆無。しずしずと準備が整えられます。



神饌は編んだ藁に包まれた赤飯や季節の花・果物で飾り付けられた御膳などで非常にカラフルです。



神事開始。式次第に従い献饌。



続いて、中央に控えていた茂山社中による奉納舞。てっきり、舞殿で舞うのかと思いきや、何と地面にゴザを敷いただけの即席舞台で舞ってくれたのでその有難味も増そうかというもの。見ての通り、かなり凸凹です。



森閑たるとはこのことではないでしょうか。あたりは何も音がせず、時折する叡電の通過音だけです。あとは社中の声のみが境内に響き渡ります。

祭典が終わると、いよいよ烏帽子着に移ります。

本日、烏帽子着（地元では袴上げの儀とも呼ぶ）を迎えるのはこのお二方。



昨今、少子化の為、16歳を迎える少年が複数揃わないことがあるそうです。ご覧の通り、今年も、以前に烏帽子着を経験された方が代役で相棒を務めたとか。

烏帽子着では16歳になった少年が宮座の大人へ杯事の饗応役を務めます。杯と肴を配り酒のお酌をします。肴は昆布とスルメ。



一方、大人は饗応への答礼として謡います。



厳かな儀式を終えて、こうして少年がひとりの大人になりました。